

この素晴らしい日常に祝福を！

変な天道虫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅魔族なのにアーツウイザードじゃない少女、くーたんが、めぐみん、ゆんゆんと共に楽しい日常を過ごしていく。

これはそんな物語。

目

次

プロローグ

第一話 この抜けてるお馬鹿に勉強を！

3 1

プロローグ

暖かな日差し、うららかな天気。
迫る春の香りが鼻腔をくすぐり、

「ひやあ！　あ、あははははっ……！　め、めぐみん、何するの……!?」
「なかなか良い反応ですね」

私はめぐみんにくすぐられていた。

「あはははっ！　あ、朝ごはんあげるから、もう許してええええ！」
「ふむ、そこまで言うなら許してあげましよう。感謝するのですよ、
くーたん」

「まつたく、いつもいつもなんであんなことをするの？」

「ふおれふあ……」

「口の中のもの飲み込んでからでいいよ！」

しばらくして、めぐみんは食べ物をごくんと飲み込み、フォークで
次の食べ物を……

「つて、何やつてるの!?　飲み込んだら質問に答えてよ！」

「……くーたんはいつも元気ですね。くすぐる理由ですか？　まあ、
くすぐると反応が面白い上に食べ物が手に入りますから」

「……」

「ほらお前ら、席につけー」

担任が入ってきたため、私とめぐみんの会話は中断される。

ここは紅魔の里にある小さな学校。

私たち紅魔族は、ある程度の年齢になるとこの学校に入学して、一
般的な知識を身につける。そして十二歳には、アークワイザードとい
う魔法使いの上級職に就けられる。

そこから魔法の修行が始まるのだ。

——まあ、私はアークワイザードじゃないんだけどね。

私の職業はマジカルソードマスター、いわゆる魔法剣士というやつ
だ。

ほとんどの人は私がアークワイザードだと思っているけど、なん

て言つたつて、私の二人の親友にも言つてないんだもん。

私の親友はめぐみんと――

「くーたん！　くーたん!!」

「は、はい!?」

「つたく、出席を取つてるんだから呼ばれたら返事くらいしろ」

「す、すみません」

「もういい……さきべりー！　どどんこ！　ねりまき！」

担任に呼ばれ、次々に生徒が返事をしていく。

そういえば、私たち紅魔族の名前は、里の外の人間から見るとおかしな名前らしい。

私がからしたら外の人たちのほうが変な名前だと思うんだけど……。

「めぐみん！」

「はい」

「よしよし、今日も全員そろつているな。では」

担任のぶつちん先生は、めぐみんの名前を呼び、名簿を閉じようと、「先生！　私の名前が呼ばれてませんが……」

したところで、一人の生徒が手を上げた。

「ん？　おおつ、すまん！　そういうや、一人だけ次のページに掛かっていたんだつたな。悪い悪い！　では……ゆんゆん！」

「は、はいっ！」

困つたような顔をしているこの娘こそ、私のもう一人の親友、ゆんゆん。

私はこんな二人と、とつても楽しく毎日を過ごしている。

だから私はこう言いたい。

このすばらしい日常に祝福を！

第一話 この抜けてるお馬鹿に勉強を！

この学校での私の目標、それは上級魔法を覚えること。

マジカルソードマスターは、上級魔法を覚えないとはつきり言つてゴミ。

かといつて剣術スキルを覚えなくても結局ゴミ。
もうおわかりだろうか。

スキルを覚えるためにはスキルポイントがいる。
つまり、魔法剣士系の職業は異常にスキルポイントとられるつてこと。

そう、私はこの学校でスキルさえ覚えられたらそれでいい。
だから、私はこの行事が一番嫌いだ。

「テストD A Z E ★」

「くーたんくーたん、キャラ変わつてる！ しかもなんか星黒いよ!!」

「まあ、くーたん頭悪いですもんね」

「ねえめぐみん、今のは私に馬鹿つて言つたの？」

そりやね？ 入学テスト主席のめぐみんや成績二位のゆんゆんから見れば？ 私は馬鹿かもだけど？

「それでも私十位だしつ、頑張つたら五位くらいはいけるかもでしょ！」

「このクラスは十一人……フツ」

「は…ははは…が、頑張つて」

もう一人なんか知らないつ！

「あるえ～」

「それで私に泣きついてきたと」

「もう頼れるのはあるえだけなの、勉強教えて」

彼女はあるえ、めぐみん、ゆんゆんに続き成績三位の天才ちゃん。
将来は作家になりたいんだとか。

「まず、くーたんはどれくらい勉強ができるないんだい？ ジゃあまずこの数式はどうだい？」

そう言つてあるえはさらさらとノートにこんな式を――

$[(3X - 4Y) (3X + 4Y)]$

「…………」

「うん、重症だね。この範囲今日やつたばつかだよ？ しかも先生が全く同じ問題を例題にしてたよ？」

「数学はちょっと……」

「あくまで数学は、だよ。

「じゃあ機動要塞デストロイヤーを作った国は？」

「…………」

「…………はあ。ここまでならもうテストは諦めた方がいいんじゃないかい？ くーたんは実技で成績とれるんだろう？」

もういいもんっ！ 一人で勉強するから！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「お母さん、お父さん、今から勉強するから部屋に入らないでね！」

「くーたん、熱でもあるの？」

「あまり無理するなよ？」

私つてそんなに勉強できない子だと思われてる？

魔法学はそれなりに得意なつもりなんだけど？

頑張つて勉強してめぐみんたちを見返してやるんだから！

『『デストロイヤーは魔法大国ノトスの科学者が作った』うーん、ノットス、ノットスねえ』

ノトスつてどんな国だつけ、魔法は異常に発達してたらしいけど
……。

「だー！ もう分かんない！ 一夜漬つてこんなに難しいの!?」

もうテストは諦めよう。

こんな無駄なものなくなつてしまえばいいのに。

格好いいセリフでも考えていた方が千倍もましだわ。

今日は将来の為に決め台詞を考えて、終わったら寝ましょ。

「どうよめぐみん！ 国語満点よ、満点!!」

「ぐぬぬ、くーたんのくせに……」

「やつぱり私にも才能があつたみたいね！」

「この学校の国語、おかしい気がするんだけど……」

「何言つてるのゆんゆん！ 格好いいセリフは紅魔族に必須なはずよ

!!」

私が国語で満点をとれた理由は、昨日の猛勉強……じゃなくて、寝る前のセリフ探しにあつた。

こここの国語のテストは、いかに“格好いいセリフ”を書きだせるか。

たまたま昨日そう言うことを考えまくっていた私は、何なくめぐみんやゆんゆんに勝つことができたのだ。……もつとも、総合点では遠く及ばないけどね。

「おーい、そろそろ席に就けー。授業始めるぞ」

ぶつちん先生が入ってきて、今日もまた始業のベルが鳴る。

そして私は今日も願うのだ。

この素晴らしい日常に祝福を！